ならちゅうしん経営研究会　例会報告

第 359 回　研究会

日　時　　令和 4 年 12 月 21 日（水）　午後 4 時　～　午後 5 時 45 分
場　所　　奈良中央信用金庫　3 階　ホール
講　師　　信金中央金庫　地域・中小企業研究所
上席主任研究員　角田　匠（つのだ　たくみ）氏
テーマ　　「内外経済情勢と今後の展望」
～世界経済の下振れリスクが高まるも、国内景気は回復基調を維持～

最初に、芳仲副会長より開講の挨拶があり、年末の恒例となりました経済セミナーを開始しました。冒頭に、来年 10 月 1 日から開始される「インボイス制度」について、桜井税務署法人課税部門上席国税調査官の吉川将弘様より解説を頂きました。

例年どおり信金中央金庫の角田先生を招いて、今回は「内外経済情勢と今後の展望～世界経済の下振れリスクが高まるも、国内景気は回復基調を維持～」と題して、コロナ禍そしてロシアのウクライナ侵攻を契機とした急速な円安の進展と目まぐるしく変動する内外の経済情勢と今後の展望などについて、お話を頂きました。

角田先生は日本経済新聞社のシンクタンクである「日本経済研究センター」より、経済予測について優秀な成績を納められたキャスターに贈られる「ＥＳＰ優秀フォーキャスター」に 2017 年度に続いて 2021 年度にも選ばれた日本を代表するエコノミストです。

新型コロナの感染長期化で日本経済は足踏み状態が続いています。今秋からは新型コロナの第 8 波が拡大、重症者が抑えられるかが今後の焦点となります。しかし感染への警戒感が和らぎ、サービス消費は持ち直しています。特に観光業界では日本人の国内旅行は回復基調で「全国旅行支援」が旅行需要回復に寄与しています。一方、インバウンドを含めた観光需要の本格回復まではなお距離があり、中国人観光客の動向が当面の焦点となります。鉱工業に目を移しますと回復基調で推移してきた生産活動は足踏みから弱含みになっており自動車の挽回生産の動きは依然として広がっていません。そして世界経済の減速を受けて製造業の景況感が下向きになっています。円安の影響としては、輸出採算改善のプラス効果は小さくありませんが恩恵は大企業・製造業に偏っており、中小企業は輸入比率が高く、円安は収益の下押し要因となっています。

今後の展望としては、資源調達、半導体不足等の供給制約を受けて回復が遅れていた設備投資は今後上向く見込みです。そして円安を背景とした国内回復の動きが広がるのは 2024 年以降とのことですが、円安の影響で電力などエネルギーの物価は高止まりし消費者物価上昇率の加速が個人消費回復に向けた逆風となります。特に身近なものが値上がりし

ているため、体感としての物価上昇率は高く、賃金上昇率を上回る物価上昇は個人消費を下押しする要因となります。一方、コロナ禍の超過貯蓄が 68 兆円積み上がっており潤沢な家計貯蓄が今後の消費回復に寄与するリベンジ消費が期待され、国内景気は回復基調を維持すると予想されます。国際情勢を展望しますと、コロナ禍からの回復に向けた最大のリスク要因は世界経済の減速で世界主要国の製造業はすでに調整局面に入っており、中国のゼロコロナ政策やアジア圏を中心としたＩＴ需要の減速も生産活動の下押し要因となります。急速に円安が進行した為替相場は日米金利差の拡大が円安ドル高の主因でありますが、ＦＲＢによる利上げは 2023 年前半で打ち止めの公算が高いのと、先般の日銀による長期金利誘導目標の引き上げにより行き過ぎた円安は緩和され 1 ドル 125 円前後に収れんするものと予想されます。

最後に来年の日経平均株価を予想頂きました。趨勢的な動きを示す 200 日移動平均線が足元プラス傾向になっていることから、一進一退から底入れを探る展開に入ると思われます。毎年恒例の干支のお話しでは、「卯跳ねる」という格言があり、卯年の平均騰落率は 16.4％です。来年は国内景気の回復を背景に堅調な相場になると予想されました。

講演のあとも、参加者より世界の経済動向に対する多くの質問、現在の中国情勢について参加者からの意見発表もあり、盛況を持ちまして、2022 年の経営研究会を締めくくりました。

以　上

芳仲副会長　ご挨拶

講師　桜井税務署　上席国税調査官　吉川氏

講師　信金中央金庫　地域・中小企業研究所　角田匠氏